

世界代表司教会議（シノドス）

第 15 回通常総会

若者、信仰、そして召命の識別

準備文書

日本語訳

2017年5月25日

バチカン

2017年

序文

「これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである」(ヨハネ 15・11)。これは、あらゆる世代のすべての人々のための神の計画です。その中には、第三千年期を生きるすべての若者が一人残らず含まれます。

福音の喜びを宣べ伝えることは、神によって委ねられた教会の使命です。「新しい福音宣教」をテーマとするシノドスと、使徒的勧告『福音の喜び』は、いかにこの使命を現代世界において成し遂げるかを扱いました。一方、「家庭」をテーマとした二つのシノドスと、シノドス後の使徒的勧告『愛のよろこび』は、家庭が福音の喜びを見いだすための助けとなるものでした。

教会はこの使命に従い、また「若者、信仰、そして召命の識別」をテーマとするシノドスを通して新しい方法を紹介しながら、どうしたら若者がいのちと愛の充満への招きに気付き、受け入れることができるか、彼らを導く方法を考察することにしました。それと共に教会は、今日、福音を告げ知らせるための最も効果的な方法を識別する際に、若者の助けを求めることにしました。若者の話に耳を傾けることによって、教会は再び、神が現代世界で語りかけることばを聴くでしょう。サムエル(サムエル記上3・1-21 参照)とエレミヤ(エレミヤ1・4-10 参照)の時代と同様に、若者は聖霊によって導かれ、わたしたちの時代の時のしるしを識別することができます。教会は、若者の願望に耳を傾けることにより、将来の世界と教会が歩むよう招かれている道を、垣間見ることができるのです。

愛の召命は、日々の生活の中での一連の選択を通して、一人ひとり、具体的な形を取ります。それらの選択は、生活様式(結婚、聖職、奉獻生活など)、職業、社会的、公的な取り組み、ライフスタイル、時間や金銭の管理などに表れます。これらの選択が自らの意志でなされるのか、単に受け入れただけなのか、意識的か無意識かにかかわらず、誰もこれらの選択を行うことから免れません。召命の識別の目的は、それらの選択を、信仰の光に照らして、皆が招かれている喜びの充満に向かう一歩へといかに変えていくかを見いだすことです。

教会は、「若者の力と素晴らしさの根拠となるものを知っています。それらは具体的には、仕事に喜んで取り掛かる力、後退せずに完全に自分自身を投入する力、立ち上がり新しいやりがい求めて再び始める力などです(第二バチカン公会議若者へのメッセージ、1965年12月8日)。教会の霊的な伝統という財産は、良心の養成と真の自由へと導く、多くの手段を与えてくれます。

今回の準備文書は、このことを念頭に置きつつ、神の民全体に意見を求めるというシノドスの段階を始めるものです。世界代表司教会議（シノドス）と東方典礼カトリック教会（*sui iuris*）の総主教評議会、各国司教協議会、教皇庁の諸省庁、さらには総長管区長会に宛てられたこの文書は、一連の質問で締めくくられています。意見収集は、若者の期待や生活についての質問が掲載されたウェブサイトを通して、すべての若者にも向けられています。双方の一連の質問への答えは、「作業文書」すなわち討議要綱草案を作成するための基盤となります。それらの文書は、シノドス教父が議論を進める上で基準となります。

この準備文書は、3段階の考察を提起しています。まず、若者が成長し意志決定を行う世界における社会的文化的原動力のいくつかをまとめ、信仰の光の中でそれらを読みとることを提案しています。次に、識別の過程への基本的段階を振り返ります。教会は、それらの段階を若者に提示できれば、若者は、信仰の光に照らして、彼らの召命を見いだすことができると思っています。最後に、本文書は、若者のための召命司牧プログラムのキーポイントを扱っています。したがって、本文書はすべてを網羅するものではなく、さらなる議論を促すための手引書のようなものです。この文書の実りはシノドスの閉会のときのみ得られるでしょう。

愛された弟子の足跡をたどって

使徒ヨハネの福音のイメージは、この道のりのはじめに、ひらめきを与えてくれます。第四福音書の伝統的解釈では、ヨハネは、イエスに従うことを選んだ若者と「イエスの愛しておられた者」（ヨハネ 13・23、19・26、21・7）両者の代表的人物です。

「そして、歩いておられるイエスを見つめて、『見よ、神の子羊だ』と言った。二人の弟子はそれを聞いて、イエスに従った。イエスは振り返り、彼らが従って来るのを見て、「何を求めているのか」と言われた。彼らが、『ラビ——「先生」という意味——どこに泊まっておられるのですか』と言うと、イエスは、「来なさい。そうすれば分かる」と言われた。そこで、彼らはずついて行って、どこにイエスが泊まっておられるかを見た。そしてその日は、イエスのもとに泊まった。午後四時ごろのことである」（ヨハネ 1・36—39）。

洗礼者ヨハネの弟子たちは、自分の人生の意味を探し求めるなかで、「何を求めているのか」というイエスの鋭い質問を聞きます。「ラビ——『先生』という意味——どこに泊まっておられるのですか」という彼らの返事に対して、主は招きをもって答えます。「来なさい。そうすれば分かる」（ヨハネ 1・38—39）。同時にイエスは、弟子たちが実際にどうするかはわからない中で、彼らが内なる旅を始め、現実的に行動を起こすように招かれました。弟子たちがその日の時間を覚えているほど、それは忘れ難い出会いでした（ヨハネ 1・39 参照）。

弟子たちは、行って自分の目で見てみるという勇気によって、キリストとの変わらぬ友情を経験し、キリストとともに毎日を過ごすことができたのでしょう。弟子たちは、イエスのことばを熟考し心を動かされ、深く影響を受けイエスの行動によって動かされたのでしょう。ヨハネは特別に、主イエス・キリストの受難と復活の証し人となるよう招かれたのでしょう。最後の晩餐（ヨハネ 13・21—29 参照）では、ヨハネとイエスの関係の親密さから、ヨハネは頭をイエスの胸もとに置いて寄りかかり、イエスのことばに耳を傾けていたのでしょう。次にシモン・ペトロが大祭司の家に行った場面では、ヨハネは苦しみと孤独の夜に直面していたことでしょう（ヨハネ 18・13—27 参照）。十字架の足元では、ヨハネは、マリアの世話をする責任を引き受けながら、彼に委ねられた聖母マリアの深い悲しみに耐えていたことでしょう（ヨハネ 19・25—27 参照）。復活の朝、ヨハネは、ペトロと空になった墓へ、混乱しながらも希望を抱いて、走って行ったのでしょう（ヨハネ 20・1—10 参照）。最後に、ティベリアス湖の漁の奇跡（ヨハネ 21・1—14 参照）では、ヨハネは復活された主に気づき、共同体全体に証言したのでしょう。ヨハネの模範は、召命の体験とは、内的識別および信仰の成熟の進んだ段階であるということを理解する助けとなり

ます。その段階は、わたしたち自身の献身と福音宣教への参加の中に、愛の喜びと満ちあふれた生活を見いだすことへと導きます。

一 現代世界の若者

この章では、社会または若者の世界の包括的な分析ではなく、召命の識別という問題に取り組む場合に有益な、社会分野における調査の結果が、提示されています。「それをもってわたしたちの心を根本から動かすことで、そこから始まる倫理的・霊的道筋の具体的基盤を築きたいと思います」（教皇フランシスコ回勅『ラウダート・シ』15）。

グローバルな視点で問題に近づくためには、各地域における特殊な具体的状況に、抱いたイメージを適合させることが必要でしょう。世界的傾向から判断すると、地球上の様々な地域における違いが重要です。若者について言えば、様々な理由で、世界は一つではなく、多様性があると言えます。これらの中で、いくつかは特に注目に値します。最初の違いは、人口統計によるものです。それは、若者が人口の割合で著しく増加している国々と、減少している国々を、高い出生率で分けるというものです。第二の違いは、歴史に基づいています。それは、古代キリスト教の伝統および文化——失われてはならない——を有する国々や大陸を、文化が他の宗教的伝統によって示される、キリスト教が少数派であり、ごく最近になって多少は見られるようになった国々や大陸と区別するというものです。最後に忘れてはならないのは、男女の性別によって生じる違いです。性別は、一方で、異なる現実の認識を決定づけ、他方では、すべての社会が克服しなければならない支配、排除、差別の様々なかたちのもととなっています。

以下のページでは、「若者」という言葉は、地域の事情に適応させる必要性を踏まえれば、約16歳から29歳の人たちを指します。どんな場合でも、「若者」という言葉は、人々のことだけでなく、各世代が、同じではない独自の方法で理解している、人生の一つの段階を指していることを思い出すとよいでしょう。

1. 急速に変化している世界

諸変化の急速な推移は、現代の社会や文化の主な特徴です（『ラウダート・シ』18参照）。この推移の高度な複雑性と速さは、かつてないほど変わりやすく不確かな状況を生み出しています。この状況が問題であるのか、それとも機会であるのか、「先験的に」判断せずに、状況の耐久性や将来のための今日の選択の結果を念頭に置きながら、十分に注意を払い長期的に計画する力が必要とされています。

不確かさの増大が脆弱な状態をもたらすということは、つまり、社会的不安、経済的困難、さらには人口の大部分の生活に見られる不安定さが結び付いた結果です。仕事に関して言えば、この状況は、失業、労働市場における柔軟性の増大、特に未成年者の搾取、あ

るいは政治的、経済的、そして社会的要因、さらには環境によって引き起こされる一連の原因を、思い起こさせます。これらは、難民移住者の数の圧倒的な増大を説明するものです。経済のグローバル化の過程によって提供された機会を享受できる少数の特権階級と比べると、多くの人々は、不安定で安全ではない状況の中に生きています。そうした状況は、彼らが人生において選んだ道や選択に影響を与えます。

現代世界は、地球規模で、「科学」に基づいた文化によって特徴付けられ、しばしば技術および無限の可能性を持つ科学的裏付けによって支配されます。その文化では「いろいろな悲しみと孤独が人々に増大しているように見え、若者たちもその例外ではありません」(『あわれみあるかたと、あわれな女』3)。回勅『ラウダート・シ』で教えられているように、技術主義の標準と短期的利益の必死の追求が、「使い捨て」文化の起源となっています。それは、多くの若者を含む何百万人もの人々を排除し、次世代の将来を脅かす、天然資源の見境のない搾取と環境の悪化を生んでいます(『ラウダート・シ』20—22参照)。

多くの社会がますます多文化、多宗教になりつつあることを見過ごしてはなりません。特に、異なる宗教の伝統が存在することは、挑戦と機会です。この状況は、不確かさ、そして相対主義の誘惑へと導きますが、同時に、実りある対話と相互の豊かさのための可能性を増大させます。信仰の視点から見れば、この状況は、よりいっそう耳を傾け、尊重し、対話することを必要とする、現代の時のしるしであると見ることができます。

2. 新しい世代

現代の若者は、両親や教育者たちとは異なる世界に生きています。経済的社会的変化が、ありとあらゆる義務および機会に影響を与えています。若者の願望、ニーズ、他人に対する感情や関わり方も同様に変化しています。さらに、ある特定の見方をすれば、若者は、グローバル化によって、世界中の地域で、より一様になる傾向にあります。それにもかかわらず、彼らは、社会性と個人のアイデンティティの形成過程に影響を与える、地域環境や彼ら独自の文化的、制度的背景にとどまります。

多文化主義の挑戦が、若者の世界に、特別な方法で存在しています。たとえば、「第二世代」(すなわち、移住の結果として、彼らの両親とは異なる社会や文化で成長する若者)の特殊性、または、ある意味では、(民族性、文化/宗教の観点から)「混ざり合った」両親の子どもです。

世界各地で、若者は、人生における真の選択をする際に困難をもたらす、特別に辛く苦しい状況を経験しています。なぜなら、彼らは自由を行使するためのわずかな可能性も持っていないからです。この状況としては、貧困と排除を経験している若者、両親や家族な

しで大きくなった若者、あるいは学校に行けない若者、多くの大都市郊外で路上生活をしている子どもと若者、失業している若者、避難民および移住者、搾取と不法取引と重労働の犠牲者、犯罪組織やゲリラ兵として強制的に集められた子どもと若者、意志に反して強制的に結婚させられた幼な妻である少女たちが挙げられます。世界のあまりにも多くの人々が、児童期から直接、成人期へ、そして彼らを選ぶことのできない責任の重荷へと進みます。しばしば女兒、少女、そして若い女性の方が、同年齢では、より大きな困難に直面します。

国際レベルで行われた研究が、現代に生きる若者の特徴を明らかにするための助けとなります。

帰属と参加

若者は、彼ら自身を、不利な立場にある、あるいは守られるべき社会集団として、あるいはその結果として、司牧プログラムまたは政策の受動的な受け手として見ていません。多くの若者が、現在起きている変化の過程に積極的に関わりたいと望んでいます。若者を重要視し、他の人々とともに活動する主役として見ている草の根のレベルでの活動や改革を経験することによって、彼らの望みは確かなものとなっています。

若者は一方で、個人の各貢献が自らのアイデンティティーを認識するための機会となりうる具体的な活動に、進んで参加し自らをささげる意欲を示します。他方で若者は、彼らが、事の是非はさておき、参加するあるいは励ましを受ける機会がないと感じている場で、不寛容さを示します。これは、諦め、もしくは、熱望する、夢見る、計画するという彼らの熱意の低下につながります。このことは、ニート（「学校教育にも、雇用にも、職業訓練にも属さない」、すなわち、若者が、勉強や仕事、あるいは召命のトレーニングなどの活動に従事していない状態）の拡がりの現象に見られます。受動的で弱気な若者と、積極的に活動的な若者との間の相違は、意味のある体験、人間関係、そして青年期の前に形成された価値観をも加えて、社会と自分が育った家庭において各人に与えられた具体的な機会に起因します。受動的であることに加えて、自信および能力の欠如は、彼ら自身の自己イメージへの過度な関心と一時的な流行への従順な服従として現れます。

個人と組織の視点

様々な調査研究は、若者が、すぐそばにいて、信頼でき、一貫性があり、そして誠実である人物を、彼らの参考となる人物として必要としていることを明らかにしています。また、若者の他者（大人と仲間の両方）と関わる能力を試し、彼らの気持ちや感情をコントロールするための場や機会も必要です。若者は、共感でき、彼らを支持し、励ましを与え、しかしながら、彼らが判断されていると感じることなく自分自身の限界を認識するよう助

けてくれる人物を、探し求めています。

この視点から見ると、両親と家族の役割は、きわめて重要でありながら、時に問題があると言えます。年上の世代には、しばしば、若者の可能性を過小評価する傾向があります。彼らは、若者の弱さを強調し、若い人たちのニーズを理解することができません。両親や成人教育者たちも、彼ら自身の間違いに気付き、彼らが若者にしてほしくないことを知ることできるでしょう。しかしながら、彼らはたいてい、若者が未来に焦点を合わせるのをいかに助けるかについて、明確なアイデアを持ち合わせていません。これについて、最も一般的な反応は、何も言わないことと、彼ら自身の選択を押し付けることの 2 つです。不在の親や過保護な親は、彼らの子どもたちを人生に直面することに対して不用意にさせたり、関わるリスクを軽視する傾向にあったり、間違ふことへの恐れに取りつかれたりします。

しかしながら、若者は、大人の間だけで参考となる人物を探してはいません。若者には、彼らの仲間の中で、参考となる人物を探したいという強い欲求があります。その結果として、若者は、彼らと一緒に自由な交流をする機会を必要とします。彼らの気持ちや感情を表すことができ、打ち解けた感じで学べる、そしてストレスや不安を感じることなく役割や能力を体験できる機会を必要とするのです。

仲間はずれにされることを生来気づかう若者は、不信感、無関心、あるいは組織への怒りをしばしば抱きます。これは、社会だけでなく、教育機関や教会組織にもますます大きな影響を与えます。若者は、教会が人々によりいっそう近づき、教会が社会問題にもっと注意を向けることを望んでいますが、すぐには実現しないことも認識しています。

これらすべては、組織に属していることと宗教活動をとおして、若者をますます性格付ける背景で起こります。若者は、公然と「拒否」しないまでも、福音によって示された神が「いない」生き方と、教会「なし」の生き方を学んでいます。また、その代わりとなる、最小限の制度となっている宗教と霊性の形態を信頼することを学んでいます。あるいは、宗派や強い宗教体験に逃避することを学んでいます。多くの場所では、教会の存在は、ますます普及しないものとなっており、その結果、出会うことがより難しくなっています。このことは、支配的な文化が、独自の伝統の要素であろうと、消費主義と個人主義によって特徴がよく表れた地域のグローバル化という現実であろうと、しばしば福音の価値とは矛盾する必要性の担い手となっている中で、起きています。

高度につながり合っている世代に向かって

今日、若い世代は、現代の通信技術と、通常「バーチャルワールド（仮想世界）」と呼ば

れる、とても現実的な影響を与えるものとの関係によって特徴付けられます。この「バーチャルワールド」は、前世代が楽しむことのなかった幅広い機会へのアクセスの可能性をもたらしていますが、危険がないわけではありません。技術的な介在によってつながり合った体験が、世界、現実、そして対人関係についての考えをいかに構築するかについて注目することはとても重要です。このことから教会は、適切な文化を発展させるために必要な司牧活動の価値を見極めるよう求められています。

3. 若者と選択

先に述べた変わりやすさと不安定さのうちに、成人期へ移行し、個人のアイデンティティを確立するには、「一連の考察手段」をますます必要とします。人々は、人生の旅を新たに方向転換することを強いられ、絶えず選択を手にしします。さらに、西洋文化の広がりとともに、いつも新しい可能性を選ぶための機会として理解される自由の観念が、出現しています。若者は、もしそれが将来において別の道に行くことを諦めるということを意味するのならば、個人の人生の旅を続けることを拒否します。「今日、私はこれを選択し、明日はまた考えます」。私的関係と職業上の関係においては、絶対的な選択よりむしろ変わりうる選択が存在しています。

この状況においては、古い手段はもはや機能せず、前の世代によって伝えられた体験は、すぐに廃れます。貴重な機会と誘引する危険は、もつれて絡み合っており、簡単には解けません。そのため、適切な文化的、社会的、霊的な手段が必要とされます。そうすれば、意志決定のプロセスは、おそらく間違ふこと、さらには導くよりもむしろ変化することを恐れるために、行き詰まって終わってしまうことはないでしょう。教皇フランシスコのことばを引用すれば、「広範囲にわたる決断をし、教育的、感情的な課題に立ち向かうために心を奮い立たせる勇気と偉大さを、どうしたら呼び起こすことができるでしょうか。わたしは、『リスクを負いなさい』というフレーズをととてもよく使います。リスクを負いなさい。リスクを負わない者は誰でも、歩んでいません。『しかし、もし間違いを犯したら、どうすればよいのでしょうか』。主がたたえられますように。もしじっとしているならば、あなたはもっと間違いを犯すでしょう」(ナザレの別荘における講話、2016年6月18日)。

勇気と鼓動の高まりを呼び起こす方法を探す際には、イエスという人物とイエスによって宣べ伝えられた福音が、多くの若者を魅了し続けているということを必ず考慮しなければなりません。

若者の選択する能力は、不安定な状況と結び付いた困難によって、妨げられます。たとえば、仕事を見つけるための彼らの奮闘や働く機会の激減、経済的自立の達成を阻む障害、そして、彼らの能力不足のためにキャリアを積み重ねられないことが挙げられます。一般

的に言えば、若い女性が、これらの障害を克服することは、さらにいっそう困難です。

家族の経済的社会的困難、若者の現代文化の一定の特徴を取り入れる方法、そして新しい技術の影響は、広い意味で、若者の教育における課題に対応する際の強い力を必要とします。これが、教皇ベネディクト十六世によって強調された、教育の緊急事態です（若者の教育における緊急性についてのローマ市および教区への手紙、2008年1月21日）。地球規模で、各国間の格差は考慮される必要があります。同様に、異なる社会に溶け込む機会を若者に与えることについても考えなければなりません。さらに、文化的宗教的要因は、たとえば、男女不平等による排除、民族的、宗教的少数派に対する差別による排除につながります。これらの差別はまた、若者を移住へと押しやっています。

この状況は特に、共通の成長のためにしっかりした計画の奉仕をさせることによって、個人のスキルを早急に向上させます。若者は、結果を出すという能力を測る実際の計画において協力する選択、生きている環境を改善することに向けてリーダーシップを発揮する選択、そして、生活および仕事に役立つスキルを、実際に習得して磨く機会を探す選択を与えられたことに、感謝します。

社会的革新は、変化のリスクから保護を求める敗者を、新しい機会を生み出す変化の主体へ変えながら、新しい世代の状況を逆さまにひっくり返す、積極的な関与を表しています。若者——受動的なことおよび未熟さの固定観念によく陥る——が、世界または教会がどのようなものであるかを示す選択肢を提示し、実践することは重要です。もし、社会またはキリスト教共同体が、何か新しいことを再び実現させたいと欲するのであれば、新しい人々が行動を起こせる空間を残さなければなりません。言い換えれば、持続可能性の原則に従って変化を考え出すことは、新しい世代が発展の新しいモデルを体験できるようにすることを必要とします。このことは、責任の地位を占める人たちの年齢が高く、世代交代のペースが減速する国々や組織において、特に問題です。

二 信仰、識別、召命

今回のシノドスの各段階を通して教会は、若者に会おう、若者に寄り添う、そしてすべての若者を一人残らず配慮するという教会の望みを、繰り返し述べます。教会は、世界が若者に露呈している孤立と排斥の中に彼らを捨て去ることができませんし、またそれを望んでもいません。若者の生き方は良い経験であるかもしれない、彼らは暴力や死のうちに自らを失わない、失望は彼らを閉じ込めたり孤立させたりしないといった、これらすべてのことが、信仰のうちに洗礼を受けていのちを授けられ、素晴らしいたまものを受けたことに気付いている人にとっては、とても重要なことであるに違いありません。

これらのたまものにより、生まれることは、人に満ち足りた人生の約束をもたらします。そして、受け入れられて大事にされることは、基礎的経験となります。その経験は、人生の意義の欠如や死の闇に見捨てられてはいないという信頼と、充滿の人生に向かう旅で個性を表すことができるという希望で、それぞれの人の心を満たします。

東方教会の知恵は、この信頼が「3つの誕生」の類比を考える上でどのように基本となっているかを理解するための助けとなります。第一の誕生は、自然な誕生、すなわち、人間が、女か男として、命を受け入れて維持することのできる世界に生まれることです。第二の誕生は、「神の愛によって神の子どもとなる」洗礼における誕生です。そして第三の誕生は、「この世における肉体の命から、来世における霊的な命へ」という一節に見られます。それは、人間に自由の完全な行使を与えます（マブグのフィロクセノスの講話、5世紀のシリアの司教9参照）。

自分が受けたたまものを他の人々に与えることは、彼らに寄り添うこと、自分の弱さや困難に向き合う彼らの人生の旅において、彼らと並んで歩くこと、そして特に、いまだ形成されている自由を行使しながら、彼らを支えることを意味します。したがって教会は、司牧者をはじめとして自己分析を行い、他の人々に配慮するという教会の召命を再発見するよう招かれています。その方法については、教皇フランシスコが教皇職をはじめにあたって、次のように奨励しています。「配慮し、守護するには、いつくしみが必要です。柔和さを生きることが必要です。福音書の中で、聖ヨセフは力強く、勇気に満ちた労働者としての姿を示します。しかし、ヨセフの心の中に見られるのは深い柔和さです。柔和さは弱者の特徴ではなく、むしろその反対に、心の強さを示します。それは、注意し、共感し、他者に心を開く力です。愛する力です」（ローマ司教のペトロの奉仕職を始めるにあたっての就任ミサ説教、2013年3月19日）。

この視点から、若者に寄り添うこと、信仰とともに始めること、そして教会の伝統に耳

を傾けることについて、いくつかの考えをこれから提示します。それらは、召命の識別において、若者を支援するという明確な目的と、彼らが人生において、基本的な選択を行うことを、それらの選択の一部は永続的であるという認識のもとに、助けるという目的をもっています。

1. 信仰と召命

信仰は、イエスの視点から、見ることです(教皇フランシスコ回勅『信仰の光』18参照)。信仰は、召命の識別の源です。なぜなら、信仰は、召命の識別に、基本的な内容、具体的な成長、個人の様式、そして教育を与えるからです。喜び進んで神の愛のたまものを受け入れることは、人生における具体的で一貫した選択を通して、それを実りあるものにする必要とします。

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である」(ヨハネ 15・16—17)。もし、愛の喜びへの召命が、神がすべての若者の心に抱かせた、一人一人の存在が実を結ぶよう求める、根本的な招きであるならば、信仰は、天からのたまものであるとともに、自分が選ばれ愛されているという思いへの応答となります。

信仰は「臆病な人の逃げ場ではなく、わたしたちの人生を広げるものです。信仰は、偉大な招き、愛の召命に気づかせてくれます。それは、愛が信頼するに足り、引き受けるに値するものであることを約束してくれます。なぜなら、愛は、わたしたちのあらゆる弱さよりも強い、神の忠実を基盤とするからです」(『信仰の光』53)。この信仰は、わたしたちの時代の男女の間に「普遍的兄弟愛」を築くことに貢献しながら、「すべての社会関係を照らす光となります」(同 54)。

聖書には、召命の招きを受け入れ、それに応えた若者のたくさんの記述があります。信仰の光に照らされて、彼らは次第に、一人一人に対する神の深い愛の計画に気づきます。それは、神が世界を「良い」場所として、命を受け入れることができる場所として創造し、信頼関係のつながりのたまものとしてお与えになって以来、神の一つ一つの行動における、神の意志です。

信じることは、聖霊に耳を傾けることであり、精神と感情の力のすべてを尽くして、道であり、真理であり、命である(ヨハネ 14・6参照)方と、対話をすることです。信じることはまた、毎日の生活の具体的な出来事の中で、また十字架に出会う時に、さらには「愛

された弟子」のように復活のしるしを見ることに喜びを感じる時に、「みことばをあかししながら」、みことばを信頼することを学ぶことです。

この対話の場所は良心です。第二バチカン公会議で教えられているように、良心は「人間のもっとも秘められた中心であり聖所であって、そこで人間は独り神とともにあり、神の声が人間の内奥で響」(『世界現代憲章』16) きます。したがって良心とは、ある約束を受け入れるよう求める招きがあらわれる、侵すことのできない場です。聖霊の声と、他の招きを識別し、どのように応えるかを決めるのは、各自の課題です。他の人々は、この課題において、同伴してその人を強めるかもしれませんが、彼らは決して、別の人物の代わりをすることはできません。

人生と歴史は、人間が、喜びの具体的な形を簡単には認識することができないことを教えています。その喜びとはすなわち、神が一人一人を招いておられる喜びであり、また一人一人が望む喜びです。変化と不確実性が広がる現代においては、その認識が簡単ではないことは、言うまでもありません。またある時には、人間は落胆や、人を充満への道の途中で立ち往生させる執着心の重圧に、対処しなければなりません。多くの人々は、たとえば次のようなことを、経験します。イエスの招きを受け入れることから自分自身を遠ざけるたくさんの財産を持った若者は、そのために、多くの喜びに満ちてではなく、悲しみながら立ち去りました(マルコ 10・17—22 参照)。人間の自由は、それは常に純化されて完全でなくてはならないという事実にかかわらず、善なるものを認識し、それを実行する基本的な力を、決して失いません。「人間は、一方では、最悪なまでに身を落とす可能性がありつつも、他方では、心的または社会的な制約があろうとも、自らを超えて立ち上がり、善なるものを選び直し、新しいスタートを切ることができます」(『ラウダート・シ』205)。

2. 識別のたまもの

不確かな状況と内なる力の葛藤に直面する中で、意志決定を行い、その人の行動を導くことは、識別を行うための場であり、さまざまな状況に適用する教会の従来からのことばです。実際に、識別の一つの形は、時のしるしを読むことにおいて行われます。時のしるしを読むことは、歴史における聖霊の存在とはたらきを認識することを導きます。それに対して、道徳的識別は、善なるものと悪なるものを見分けます。さらに、別の形である霊的識別は、誘惑をはねのけるために認識し、人生の充満に向かって進むことを目的としています。これらの識別のさまざまな意味は明らかにつながっており、一方を他方と完全に分けることはできません。

このことを念頭に置いて、シノドスでは、召命の識別に取り組みます。召命の識別とは、人が、神との対話において、聖霊の声に耳を傾けながら、人生におけるその人の状況の選

択をはじめとする基本的な選択を行う過程です。個人が、自己実現のための機会をどうしたら無駄にしないで済むかという問いかけは、すべての男女に本質的なものです。信者にとって、その問いかけは、より強く、深いものとなります。つまり、人は福音のよい知らせをどのように生きることができるか、そして人は、神が、出会うすべてのものに向けて呼びかける招きに、結婚、聖職、または奉獻生活を通してどのように応えることができるか。人の才能は、職業、ボランティア活動、貧しい人々への奉仕、市民または政治生活における関わりなどのどこで生かされるか、という問いかけです。

聖霊は、それぞれの生活における出来事を通して語りかけ、はたらきますが、それらは、さまざまな解釈が自由にできるという点で、不明瞭または曖昧です。識別は、それらの意味を明らかにし、意志決定することを必要とします。使徒的勧告『福音の喜び』51 では、識別を表現するために 3 つの動詞、すなわち、「見分ける」、「解釈する」、そして「選ぶ」が使われています。これらの 3 つの動詞は、個人またはグループ、そして共同体が、それらの異なる段階の境界線が、実際には決して明確に描かれないということを、十分に認識した上で、適切な計画を綿密に立てるために役立ちます。

見分けること

何よりもまず、「見分ける」ことは、人生の出来事、出会う人々、そして耳にしたり読んだりする言葉が、内なる生命力、すなわち、さまざまな「欲求、気持、感情」（使徒的勧告『愛のよろこび』143）およびそれらの多様な表現、たとえば、悲しみ、暗さ、満足感、恐れ、喜び、平安、空虚感、優しさ、怒り、希望、無関心などに、どのように影響するかに関係します。人は、どのように対処するのかはっきりしないまま、良い時期や悪い時期、場合によっては、実際、内面に起こっている葛藤などさまざまな方向に、引き付けられたり、押しやられたりします。「見分ける」には、こうした感情の豊かさが表れ、これらの気持を裁くことなく確かめることを必要とします。「見分ける」にはまた、残っている「味わい」、すなわち、経験したことと、心の奥に残っていることとの間に、一致と不一致をとらえることを必要とします。

この段階では、神のみことばが重要です。その意味を黙想することは、実際、内なる自分に触れるすべての経験のように、熱い思いを呼び起こします。それと同時に、神のみことばが物語る出来事において、情熱が表れ、情熱と一致する可能性が開かれます。「見分ける」という段階では、聞く能力そして気持ちや感情が、重要視されます。その際には、沈黙という大変な努力、すなわち個人の成長における重要な段階を避けることはできません。特に若者にとってはなおさらです。若者は、大きな重圧のもとに、さまざまな強い欲求を経験していますが、それらの強い欲求によって、おじけづくことも、彼らが引き寄せられる大いなる前進を断念することもできないのです。

解釈すること

これまで考察してきた「見分ける」ことだけでは、十分ではありません。次の段階は「解釈する」ことです。言い換えれば、聖霊が、それぞれの心に何を呼び起こし、それを通して聖霊が、その人に何をしよう招いているのかを理解することです。人は、しばしば、体験は「強烈な印象」を与えようと言いながら、その体験について話すことをやめます。体験した欲求や感情の源と意味を理解することは、さらに困難です。また、それらの欲求や感情が、建設的な方向に向いているのか、それとも、自分自身の中に閉じこもらせる方向に向いているのかを確かめることも、非常に困難です。

この解釈の段階は、とても繊細であり、忍耐、用心、そして確かな知識をも必要とします。人は、社会的、心理的な条件が及ぼす影響を考慮する能力を必要とします。その能力は、知性も必要とします。しかしその際には、何をするのがよいことであり、ふさわしいかについて抽象的理論を構築するという罠に陥ることがあってはなりません。識別においてさえ、「現実には理念に勝る」(『福音の喜び』231) のです。同様に、「解釈する」際には、現実には直面し損なうことも、また現実的に有効な可能性を考慮し損なうこともあってはなりません。

「解釈する」欲求と内面的な動きは、神のみことばに照らされ、またキリスト教生活の道徳的な願いのもとに、率直に向き合うことを必要とします。経験した具体的状況に、それらを常にあてはめてみる必要があります。この努力は、それを行った人が、最小限の律法主義的な論法によらず、与えられた才能と可能性を最大限に活かし、若者を魅了し、感動させるメッセージをもたらす方法を探し求めるように、導きます。

解釈の作業は、神との内的な対話において、個人の能力を最大限に用いて行われます。経験豊かな人が、聖霊に耳を傾けることにおいて手助けすることは、教会が提供する貴重な支援であり、その支援を無視することは賢明ではありません。

選ぶこと

すべての欲求と感情が見分けられて、解釈されたら、意志決定を行う次の段階は、真なる人間の自由と個人の責任を行使することです。それは、当然、具体的状況に結び付いており、それゆえに制限されています。選ぶことは、衝動という盲目的な力にさらされます。現代社会における一定の相対主義は、最終的にその衝動に行き着きます。それは、変化し続ける状態に人を閉じ込めるような規範を、究極な規範として取り入れることによってなされます。同時に、人は、自分自身の外に存在する力への服従、すなわち、他律性から解放されます。これらすべては、生涯を通して一貫性のあることを必要とします。

歴史の中の長期にわたり、人生における基本的な選択は、関係する個人によって行われてきませんでした。第一章で触れた地域では、そうした状況がいまだに存在しています。真の自由と責任ある選択を促すことは、過去の慣習からは除かれましたが、すべての重要な召命司牧プログラムの目標であり続けます。識別は、良心における不可侵な場所を、それを入れ替えるよう装うことなく、守るための主な手段です（『愛のよろこび』37 参照）。

決定は、それが正しい決定かどうか確かめる事実によって、証明されなければなりません。選択は、内面性に閉じこもったままであり続けることができず、バーチャルか非現実的——現代文化において強まった危険——なまま存在しそうです。そうではなく、選択は、欲望や感情を引き起こす現実と直面する危険を受け入れながら、行動に移されるべきもの、具体化されるべきもの、道へと歩みだすものとなるべきです。他の欲望や感情は、この段階で生じます。すなわち、それらを「見分け」、「解釈する」ことは、その決定がよいかどうか、再評価するのに望ましいかどうか、検討する可能性を与えます。その結果として、「外へ出る」ことが重要となります。前述したように、たとえ間違いを犯すことへの恐れにより、動きが制限されるとしてもです。

3. 召命と宣教への道

召命の識別は、単一の行動では成し遂げられません。たとえ、召命の成長について詳しく話すとしても、はっきりと瞬間や決定的な出会いを見分けることは可能です。召命の識別は、人生において重要なすべてのことに関して、時間をかけて次々と明らかにする、長い過程です。その間、人は、とても個人的で独特な召命を指し示すために、主が用いるしを観察し続けます。神は、アブラハムとサラに、彼らの生まれ故郷を離れるように命じました。しかしながら、それは、段階的な過程をたどって、——段階を誤ることなく——命じられました。その過程は、最初は隠されていたものを、明らかにしています。「わたしが示す地に行きなさい」（創世記 12・1）。マリア自身は、たとえその意味が分からなくても、自分の召命に気づき、自分が聴いたことばと起きた出来事を思い巡らし、成長を遂げています（ルカ 2・50—51 参照）。

時間は、行った意志決定の有効性を確かめる上で、基本となるものです。聖書の各ページで教えられているように、すべての召命は、熱意のあるなしに関わらず、実行された使命に向けられています。

使命を受け入れることは、命を懸けるという意志と、イエスの歩みに倣って、十字架の道を行くという意志を表します。イエスは、固い決意でエルサレムへの旅に出かけて（ルカ 9・51 参照）、ご自身の命を人類のために差し出したのです。自分の欲求で自分のことば

かり考えるのをただやめるだけで、人は、家庭生活、聖職あるいは奉獻生活において、神の計画を受け入れることができるように心を開かれ、真剣に自分の職務を遂行しようとし、また、心から共通善を求めようとし、特に文化が、個人主義によって、より深く傷つけられる場所においては、選択がどういうものであるか、調べる必要があります。自己実現の追求は、自己愛の結果と言えるかどうか、そうではなく、人生を、自己に与えられたたまものである寛大さに従って、論理的に生きようとする意志を含むかどうか、確かめる必要があります。したがって、貧困に触れること、傷つきやすいこと、必要に迫られることは、召命の識別に向かうためには、非常に重要です。何よりも、神学校の養成担当者は、神学生に、「羊の匂い」が染みつく意志があるかどうかを確かめて、育てるべきです。

4. 寄り添うこと

3つの基本的な確信が、召命の識別の根底にあります。それらは、信仰の光とキリスト教の伝統において理解されるすべての人間の経験に、根差しています。第一の確信は、聖霊が、考え、イメージ、そして計画などに結び付く気持ちや欲望を通して、全ての男女の心にはたらくというものです。人間は、これらの合図を、注意深く耳を傾けながら解釈することができます。第二の確信は、人間の心が、その弱さと罪のために、本来は分裂してしまうというものです。なぜなら、心は、異なる感情、反対の感情にさえ、引き寄せられてしまうからです。第三の確信は、すべての生き方は、選択を強いられるというものです。なぜなら人は、不確かな状態にいつまでもとどまることができないからです。人は、神の愛の喜びへの招きを見分けるために必要とされる、手段を選ばなくてはなりません。そして、神の招きに応えることを選ばなくてはならないのです。

これらの手段において、教会の霊的な伝統は、個人に寄り添うことの重要性を強調しています。他の人に寄り添うことにおける、識別についての教えの研究は、十分ではありません。人は、聖霊のはたらきを認識できるよう心の動きを見極めるという困難で個人的な経験を必要とします。聖霊の声は、一人一人の固有の個性に語りかけるのです。個人に寄り添うことは、聖霊の声に対して、感受性を絶え間なく洗練させることを必要とすると同時に、その人の個性の資質と豊かさを発見することへ導きます。

それは、神と人との関係を育て、それを妨げるかもしれないものを取り除くことを助けるという問題です。識別において寄り添うことと、心理的な支援との違いは、ここにあります。それは、超越性を受け入れる時に、しばしば、基本的に重要となります。心理学者は困難に陥っている人々を支援し、彼らが自分の弱さや可能性に気づくことができるよう助けます。霊的な指導は、その人を神の方へ再び向かわせ、神との出会いのための基盤を用意します（ヨハネ 3・29—30 参照）。

福音書に記されている、イエスの、同時代の人々との出会いは、召命の識別において、若者に寄り添う人物の理想像の一部となる、明白な要素を浮き彫りにしています。それらは、愛のまなざし（最初の弟子たちの招き、ヨハネ 1・35—51 参照）、権威ある言葉（カファルナウムの会堂での教え、ルカ 4・32 参照）、「隣人になる」資質（善いサマリア人、ルカ 10・25—37 参照）、「並んで歩く」選択（エマオの弟子たち、ルカ 24・13—35 参照）、そして、恐れることなく先入観に逆らう真の証言（最後の晩餐で足を洗う、ヨハネ 13・1—20 参照）です。

若い世代に寄り添うという課題において、教会は、若者の喜びに協力するという教会の召命を受け入れます。それは、彼らの信仰を支配しようとするものであってはなりません（二コリント 1・24）。このような奉仕は、最終的には、祈りにおいて、さらには、一人一人を教え導く聖霊のたまものを求めることにおいて築かれます。

三 司牧活動

教会は、特に不確かで変わりやすく不安定な現代において、若者が福音の喜びへの招きを受け入れることを、どのように助けるのでしょうか。

この章の目的は、課題に関わる人々、指導が行われる場所、そして利用できる手段を考慮しながら、いかに真剣に司牧的配慮と召命の識別の課題に対処するかに目を向けることです。この点において、若者のための司牧的かつ召命に関する配慮は、さまざまな相違を伴いながらも、互いに結びついています。以下の概要は、テーマをすべて扱うことを意図しているのではなく、各地域の教会が経験したことに基づいて、さらに詳細に仕上げられるべき指針を提示することを目的としています。

1. 若者とともに歩むこと

若者に寄り添うことは、先入観で作った枠組みを越え、彼らがいる場所での出会い、彼らの時間と生活のペースに合わせ、彼らのことを真剣に考えることを必要とします。このことは、実行されなければなりません。なぜなら、若者は、彼らの生きている現実を理解しようとしているからです。そして若者は、日々、自分の経歴を築き上げようと試みたり、自分の人生の意味を多少なりとも意識的に探し求めたりする言動の中で、受け取った教訓を活用しようとしているからです。

日曜日ごとにキリスト者は、聖餐式においてイエスと出会い、主が十字架につけられて復活した記憶を思い起こし続けます。多くの子どもたちは、教会の信仰において洗礼を受け、キリスト者として出発する旅に出ます。しかしながら、これは、信仰生活のための成熟した選択を行うことと同じではありません。この時点に到達するには、時に予測不可能な道と、教会共同体の習慣からかけ離れた場を含んでいる旅が必要です。これについて、教皇フランシスコは次のように言っています。「召命のための司牧の奉仕職とは、イエスのなさり方を学ぶことです。イエスは、日常生活の場を通り、急ぐことなく立ち止まり、そして、わたしたちの兄弟をいつくしみをもって見つめながら父なる神と出会うように導きます」（召命司牧活動についての国際会議参加者への演説、2016年10月21日）。若者とともに歩むことにより、キリスト教共同体全体は築き上げられます。

この提言は若者の自由に関するものであるからこそ、それぞれの共同体は、自分と結び付けて若者に話をし、個人の成長を支援するという独創的な方法を重視する必要があります。多くの場合、その作業は、何か新しいことを可能にさせる学習を含み、先入観で作った枠組みをあてはめようとして新しいものを抑制しません。もし閉鎖的で「『いつもこ

うしてきた』という自己満足的な司牧姿勢」で対処されるならば、また、「自分の共同体の目標や構造、宣教の様式や方法を見直すというこの課題に対して、大胆かつ創造的」（福音の喜び 33）な人々に関わらなければ、その召命の種は実を結びません。イエスが同時代の人々に出会った方法を言い表している福音の中の 3 つの動詞、「出向いて行く」、「見る」、「招く」は、司牧の様式を採り入れる上で、助けとなるものです。

出向いて行くこと

召命司牧活動とは、何よりもまず、福音の喜びに宣べられていることを信じられないとするかたくなな態度を捨てて、「出向いて行く」よう求める、教皇フランシスコの招きを受け入れることです。束縛されていると感じる枠組みを脱却することによって「出向いて行く」のです。そして、教会として行動するという、時に時代遅れな方法をやめて、「出向いて行く」のです。それは、日々の活動や関心からの内的自由の表れである、「外へ出る」ことでもあります。そうすれば、若者は、自分の人生の主役になることができます。若者は、彼ら独自の貢献がキリスト教共同体によって歓迎されているのを見るとき、教会をより魅力的に感じるでしょう。

見ること

若者の世界に「出向いて行く」ことは、彼らと一緒に時間を過ごし、彼らの人生の話に耳を傾け、そして彼らの喜び、希望、悲しみ、不安に注意を向ける意志を必要とします。すべて彼らと共有しようとする努力です。これは、福音の文化内受肉、福音があらゆる文化に、若者の間にさえ浸透することをもたらします。イエスが同時代の男女と出会う福音の記述では、彼らとともに時間を過ごしたイエスと、彼らと視線を交わしたイエスの魅力が、まさに強調されています。同じことが、心の奥底を、押し入らずに、あるいは脅かさずにのぞき込むことができる、真の司牧者の場合にも言えます。これが、他人の良心の占有を欲することもなければ、神の恩恵の道をあらかじめ決めることもない、自分自身の精神構造を傍らに置くことから始める、真の識別の目です。

招くこと

福音の記述では、イエスの愛のまなざしは、あることばに変えられています。それは、受け入れられる、求められる、そして築かれるという新たな人生への招きです。何よりも、招くとは、欲求を呼び起こすこと、彼らを遮るものや、彼らを鈍くする自己満足から人々を目覚めさせることです。招くとは、既成の答えがない質問をすることです。受け身的に決められたことを遵守することによってではなくこのような方法で、人々は旅に出させられ、福音の喜びに出会うようにさせられるのです。

2. 主体

一人残らずすべての若者

若者は、司牧活動において客体ではなく、主体です。社会はしばしば、若者を不必要なもの、または迷惑なものに見なします。教会はそのような態度を二度とすることはできません。なぜなら、すべての若者は一人残らず、人生の旅において導かれる権利を持っているからです。

したがって、それぞれの共同体は、若者、特に貧困、社会的疎外や排除を経験している者に目を向け、彼らが人生で関わり合いをもつように導くよう招かれています。貧困や困難、暴力、戦争、病気、障がい、そして苦しみの真っ只中に生きている若者に寄り添うことは、聖霊の特別なたまものです。それは、教会による適切な行動様式、すなわち、「出向いて行く」ことをまさに明示するものです。教会自身は、若者から学ぶよう招かれています。多くの若者の聖人は、この事実をはっきりとあかししています。そして、すべての者にひらめきを与え続けています。

責任を担う共同体

キリスト教共同体全体は、新しい世代を教育する責任を感じるべきです。実際、教会生活のうちにこの責任を担っている人々をはじめとする、この仕事に関わる多くのキリスト者は、感謝に値します。福音生活の善とあふれ出る喜びを毎日あかしする人々の努力も、同様に称賛されるべきです。教会は、主に、司牧委員会をはじめとする教区および小教区の共同体に参加する構造における若者の関わりを、重要視することが必要です。教会はまた、若者を彼らが創造的な貢献をするように招き、彼らが挑戦的に見える時でも彼らの考えを受け入れる必要もあります。

世界各地に、小教区、修道会、カトリック団体、運動、そして教会施設が存在します。それらは若者に、成長と識別の重要な経験を考案し、提供することができます。時に、その計画の側面には、準備不足やスキルの欠如の兆しが現れます。その状況は、若者のための司牧プログラムを正しく、一貫した、そして効果的方法で、考える、具体化する、調整する、そして実行するという課題に、もっと真剣に取り組むことによって、避ける必要がある状態です。そのような課題においては、養成に対する責任ある具体的で継続的な準備も必要とされるでしょう。

参考となる人々

信頼できる大人と仲間の役割が、人間の発達と召命の識別においては基本となります。これには、人間としてのはっきりとしたアイデンティティー、教会への強い帰属意識、目

に見える霊的な特徴、教育への強い情熱、そして、識別の優れた能力を持つ、真の信仰者が必要とされます。しかしながら、準備ができていない未熟な大人たちはしばしば、独占欲の強い、人を巧みに操る態度で行動する傾向にあります。否定的な依存関係、不利で深刻な反対証言を生み出しながら、その行動は、虐待の段階にまで激化することがあります。

信頼でき参考となる人々を持つには、彼らをトレーニングし、支援することが必要です。また専門的な教育学的スキルを提供することも必要です。特にこれは、聖職および奉献生活への招きを受け入れるための召命の識別において、同伴する課題を担っている人々にあてはまります。

<両親と家族>

両親と他の家族の一員によって果たされるかけがえのない教育的役割は、すべてのキリスト教共同体において、認められるべきものです。家族の中でまず両親が、毎日、神は一人一人の人間を愛をもって思いやってくださることを伝えます。その愛は、彼らを互いに結び付け、そして子どもたちとも結び付けます。この点について、教皇フランシスコは、『愛のよろこび』の中のこのテーマに関する章において、貴重な内容を述べています(259—290参照)。

<司牧者>

時間や手段をささげることによって若者と真に関わることができる聖職者と、無私無欲なあかしの助けに助けられながら修道女や修道士たちとの集いは、新しい世代の成長に決定的な役割を果たしています。この点について、教皇フランシスコは、次のように述べています。「わたしは、特に教会の司牧者、司教、司祭の皆さんが、キリスト者と聖職者の召命に対して、主に責任を担っていると申し上げたいと思います。そしてその任務は、官僚組織に任せることはできないものです。他の司祭——教区司祭、聴罪司祭、霊的指導者——が、皆さんが神の愛の素晴らしさを経験するのを助けた時、皆さん自身も、人生を変えた出会いを経験したのです。このように、皆さん自身も、出向いて行って、若者の声に耳を傾けることによって——それは忍耐を必要とします——、若者が彼ら自身の心の動きを理解するのを助け、彼らの歩みを導くことができるのです」(召命司牧活動についての国際会議参加者への演説、2016年10月21日)。

<教師および他の教育者>

多くのカトリックの教師は、大学や学校で、すべての学年およびレベルの教育に関わっています。また多くの者は、職場においても、熱心に、有能に従事しています。さらに他の信者たちは、より公正な社会のためにパン種になろうとしながら、社会生活に関わっています。社会の中でボランティア活動に従事している多くの人々は、彼らの時間を共通善と

神から創られた物を大切にするためにささげています。とてもたくさんの人々が、熱心に、また喜びを持って、自由時間の活動とスポーツに参加しています。これらの人々はすべて、人間そしてキリスト者の召命をあかししています。その召命は、信仰と献身とともに、受け入れられ、生かされるものです。彼らの姿を見る人は、彼らのようになりたいと思わずにはいられません。したがって、自分の召命に喜んで応答することは、召命司牧活動を行う上で最初の一步です。

3. 場

日々の生活と社会的な取り組み

大人になるということは、人生のさまざまな局面に自立して対処できるように学ぶことを意味します。一度にまた同時に、日々の生活の基本および本質的な部分を学びます。具体的には、時間と金銭の使い方、生活様式、物品やサービスの利用方法、勉強と娯楽、衣服や食べ物、感情と性的関心などです。若者にとって、このような避けられない課題を学ぶことは、彼らの生活で物事の優先順位をつけるための一つの機会にもなります。その行動方針の選択とは、識別作業と、非常に重要な決定をする際の人生の方向付けです。信仰がより本物であればあるほど、信仰は毎日の生活に挑戦し、そしてそれ自体への挑戦を許します。仕事の世界における経験は、時に困難や問題があり、雇用不足と同様に特筆に値します。これらもまた、自分の召命を受け入れる、あるいはより深く考える機会です。

貧しい人々は、叫びます。そして彼らとともに、地球も叫びます。双方に耳を傾けることは、神そして教会に出会う本物の機会、また自分の召命を見いだす機会となり得るものです。教皇フランシスコは、共通の家と貧しい人々の生活の質を配慮することにおいて、共同体の活動について次のように教えています。「それが自己譲与の愛を示すとき、とりわけ豊かな霊的体験にもなるでしょう」(『ラウダート・シ』232)、そしてその結果、人生の旅と召命の識別における機会にもなるでしょう。

司牧活動の具体的な場

教会は、若者に、出会い、文化的養成、教育、宣教、ミサそして奉仕のための特定の場を提供しています。教会自身が真っ先にすべての人々をどんな人でも受け入れています。これらの場と若者に関わる司牧従事者の課題は、若者へのメッセージの統合ネットワークの発展をますます促進させることであり、「出向いて行く」、「見る」、「招く」の適切な方法を導入することです。

——ワールドユースデー

ワールドユースデーは、世界レベルなものです。司教協議会と各教区は、若者のための特別な行事や経験を提供する責任をますます担っています。

——小教区が提供する若者のための行事、活動、時間や旅程

秘跡に基づく生活は、彼らの生活において、神のたまものを受け入れる能力を成長させるための基本的な機会を与えると同時に、教会の使命に行動的に関わるようになる招きを与えます。若者のための施設および小聖堂があることは、若者に対する教会の関心の表れです。

——大学およびカトリック系の学校

貴重な文化的、教育的活動を行う大学およびカトリックの学校は、若者の間で、今もなお教会の存在を示すものです。

——社会活動およびボランティア活動

社会活動およびボランティア活動は、無私無欲な活動のための機会を提供するものです。この点において、貧しく、社会の片隅に追いやられた人々と交わることは、霊的な成長と召命の識別のために恰好の機会です。なぜなら、この視点から見ると、貧しい者は、一つの教訓を与えることもできます。実際に、貧しい人々こそ、彼らの内で、救い主が弱さの内に現れるというよい知らせを携える人なのです。

——カトリック団体および教会の活動

カトリック団体および教会の活動は、多くの霊的な施設と同様に、若者に識別のための特別なプログラムを提供します。宣教の体験は、利他的な活動であり、実り多い変化をもたらします。巡礼の再発見は、人生の旅を続ける形式および方法として価値があり、とても有望です。多くの場所で民間信心は、若者の信仰を養い、育てます。

——神学校および養成機関

神学校および養成機関には、実践的な重要性があります。なぜなら、神の招きに応える若者を生み出すという使命を負っているからです。そこでは、彼らが他の者に寄り添うことができるようにするために密接な共同体生活を営む体験も提供されています。

デジタル世界

これまでに述べてきたことすべてにより、「新しいメディア」界は、特別の注目に値します。なぜなら、若者の場合は特に、それは彼らの生活において実に重要な位置を占めるからです。「新しいメディア」は、特に情報へのアクセスに関しては、遠隔地とのつながりを構築しながら、多くの新しい機会を提供します。しかしながら、それらは、危険ももたらします（ネットいじめ、ギャンブル、ポルノ、チャットルームの隠れた危険性、思想的な嫌がらせなど）。世界の各地域には、このメディア分野において、多少の違いがありますが、

キリスト教共同体は、新しい「アレオパゴス」で、共同体の存在を高めつつあります。ここでは、若者が共同体に教えるものがたしかにあるのです。

4. 手段

司牧活動における表現方法

教会の活動では多くの実りある出会いがあり、聖書、典礼、芸術、カテケージス、そしてメディアの領域においては若者の期待がありますが、教会は時に、若者に話しかけるための適切な言葉や表現を見いだすことに困難を感じます。多くの人々は、教会がその活動に大いに若者を参加させることができる次のような姿を思い描いています。すなわち、特に教会が若者の表現方法を用いることをとおして、また、若者の創造力と才能の重要性を評価し、そうすることによって、教会の活動の中に若者を参加させることのできる教会の姿です。

特にスポーツは、さまざまな機会を提供する一つの教育手段です。音楽や他の芸術的表現はそれ自体が、若者が彼らの個性を明示することができる非常に優れた手段です。

教育的配慮と福音宣教の道

若者との司牧活動は、場を支配することよりも段階をはじめめることを求められており、何よりも、一人一人の人間の成長のための活動とその助けとなる教育と養成の手段の重要性を表しています。宣教と教育の間には、生産的な発達をもたらす結びつきが存在します。すなわち、その結びつきは、現代社会における自由の漸進的な成熟が考慮されなければなりません。

過去の状況とは違い、教会は、信仰に取り組む方法がそれほど共通化されていないという事実慣れる必要があります。そのため、教会は、一人一人の個性にもっと目を向けなければなりません。キリスト教入信の伝統的段階に従い続ける人々と一緒に、多くの人々は、神にそして信者の共同体に、他の方法で後の人生で出会います。たとえば、正義への努力、あるいは、教会外の信頼できるあかしびととの触れ合いから生まれる方法です。共同体にとっての課題は、ユダヤ人やサマリア人と、ギリシャ文化の異教徒やローマの支配者と、彼ら一人一人の深い欲求を掴みながら話をするのができたイエスの例に倣いつつ、すべての人を受け入れることです。

沈黙、観想、祈り

最後に最も重要なことですが、識別は、神との親密さを深めることなしには、また、みことばとの対話なくしては、可能ではありません。特に「霊的読書」は、教会の伝統が常に行ってきた有益な方法です。

ますます喧騒で、過剰な刺激を与える社会では、若者の司牧ケアにおける基本的な目的の一つに、若者に、沈黙と観想の価値を楽しむ機会、自分の経験を理解することにおいて養成を受ける機会、そして自分の良心に耳を傾ける機会を提供することがあります。

5. ナザレのマリア

シノドスのプロセスは、マリアに委ねられています。このプロセスにおいて教会は、若者が愛の喜びと生活の充満への神の招きを受け入れるために、若者にどのように寄り添うかについて、自己分析を行っています。ナザレに生まれた若い女性のマリアは、彼女の人生のあらゆる段階で、神のみことばを受け入れ、心に留め、心の中で思いめぐらしました（ルカ 2・19 参照）。マリアは、この歩みを実行した最初の人物です。

すべての若者は、マリアの人生の中に、耳を傾ける方法、信仰が生み出す勇気、識別の深さ、そして奉仕への献身を見いだすことができます（ルカ 1・39—45 参照）。ヨセフのいなずけであったおとめマリアは、身を「低く」して、人間の弱さと、神の秘められた意志を理解することの難しさを経験しました（ルカ 1・34 参照）。マリアはまた、自分自身から脱し、信頼することを学ぶ自らの計画にしたがって生きるよう招かれました。

全能の神がマリアに成し遂げられた「偉大なこと」（ルカ 1・49 参照）を思い起こすと、おとめマリアは孤独を感じることなく、十分愛されて、天使の「恐れることはない」（ルカ 1・30 参照）ということばに支えられていました。神が自分とともにいることを知りながら、マリアは、「わたしはここにいる」ということばに心を開き、そしてこのように福音の旅はじまったのです（ルカ 1・38 参照）。イエスの十字架の足元で、「愛された弟子」とのつながりを得た、「とりなす方」（ヨハネ 2・3 参照）は、人間の歴史において、豊かに生き、命を生み出す招きを受け入れました。マリアの目で見ると、すべての若者は、識別の素晴らしさを再発見することができます。そして、マリアの心で見ると、すべての若者は、親密さがもつ優しさと、あかしすることの勇気、使命への勇気を経験することができるのです。

質問

本質問の目的は、「権限ある」当該機関が、若者の世界に対する理解を表し、召命に同伴するという経験を考察する際の助けとなることです。これは、シノドスの作業文書すなわち「討議要綱」草案を作成するための情報収集を意図しています。

異なる大陸および地域の様々な状況を考慮できるように、各地域への 3 つの具体的な質問が、該当する教会組織からの応答を引き出すために、質問 15 の後に挿入されています。

この作業を円滑で首尾一貫したものにするために、各組織は、回答を次の範囲内にとどめてください。統計上の質問に対して約 1 ページ、状況を考察する質問に対してはそれぞれの質問に 1 ページ、そして各大陸および地域への 3 項目の経験の分かち合いに対しては各 1 ページで回答してください。必要や要望に応じて、回答の内容を裏付けたり補ったりするために、他の文書を添付することもできます。

1. 統計データの収集

統計の情報源と年度をできるだけ示してください。各国の状況をよりよく理解するために有益な他の情報も添付できます。

- ・国または諸国の人口と出生率
- ・国または諸国の若者（16～29 歳）の数と割合
- ・国または諸国のカトリック信者の数と割合
- ・結婚の平均年齢（ここ 5 年以内、男女別）、神学校および奉献生活に入る平均年齢（ここ 5 年以内、男女別）
- ・16～29 歳の集団における、学生、労働者（可能であれば、職種を明記）、失業者、ニートの割合

2. 状況の考察

a) 若者、教会、社会

以下の質問は、教会の取り組みに参加している若者だけでなく、それらに参加していない、あるいは参加することに関心がない若者に関するものでもあります。

1. 教会は、どのような方法で、若者の現実に耳を傾けていますか。
2. あなたの国または諸国で、今日、若者にとっての最大の挑戦および最も重要な機会は何ですか。
3. どのような若者の集まりの種類と場（制度化されるか否かにかかわらず）が、教会「の中で」大きな成功を収めていますか。なぜですか。
4. どのような若者の集まりの種類と場（制度化されるか否かにかかわらず）が、教会「の外で」大きな成功を収めていますか。なぜですか。

5. あなたの国または諸国で、今日、若者が教会に真に求めているのは何ですか。
6. あなたの国または諸国で、若者が教会共同体の生活に参加するには、どんな参加の可能性がありますか。
7. 教会にあまり行かない若者と、どうやって、またどこでつながりを持つことができますか。

b) 若者のための召命司牧プログラム

8. 家族および共同体は、どのように、若者の召命の識別に関わっていますか。
9. 小・中・高等学校、大学、または他の（民間あるいは教会の）教育機関は、どのように、召命の識別における若者の養成に貢献していますか。
10. デジタル世界の発展の結果として生じた文化的変化をあなたはどのように考えていますか。
11. ワールドユースデーや他の国内、国際イベントは、通常の司牧活動にどのように組み込まれていますか。
12. あなたの教区は、若者のための召命司牧プログラムをどのような形で計画していますか。

c) 若者に寄り添う司牧従事者

13. 聖職者その他の養成者は、各個人への霊的指導をどのくらいの時間、どのような方法で、行っていますか。
14. どのような養成のための取り組みと機会が、召命司牧指導のために行われていますか。
15. どのような個人指導が神学校で行われていますか。

d) 地域別の質問

アフリカ

- a. 若者のための召命司牧ケアにおいて、どんな観点や仕組みが、あなたの大陸の必要性に最もよく応えていますか。
- b. 父親像のない状況で育った人にとっては、「霊的父性」とはどのように解釈されるでしょうか。どんな養成が行われていますか。
- c. 若者が教会の未来を築くために必要とされているということを、どのように若者に伝えますか。

アメリカ

- a. あなたの共同体は、極度の暴力（ゲリラ戦、非行グループ、刑務所、麻薬中毒、強制結婚）を経験した若者をどのようにケアし、さまざまな形で彼らの人生に寄り添っていますか。

ますか。

b. 社会および市民生活における若者の関わりを、共通善に向けて後押しするために、どんな養成が施されていますか。

c. 非常に世俗化された世界において、キリスト教入信の諸秘跡を受けた後に信仰の旅を続けるためには、どんな司牧活動が、最も適切ですか。

アジアとオセアニア

a. 非カトリック信者による宗教的集まりは、どうして、そしてどのように、若者を引き付けているのでしょうか。

b. 地域文化の価値観は、民間信心に重きを置きながらも、どのように、キリスト教の教えと結び付いていますか。

c. 特にメディア、スポーツ、音楽などにおいて、若者のための司牧活動ではどのような言葉が使われていますか。

ヨーロッパ

a. ヨーロッパにおけるキリスト教の伝統の豊かさによって、若者が、自信と希望をもって未来に目を向けられるようにするために、どんな支援が与えられていますか。

b. 若者はよく、彼らが生きている政治、経済などの社会的状況において脇に追いやられた、除外されたと感じています。どうしたら、その反感を汲み取り、参加や協力へと変えることができるのでしょうか。

c. 世代間の関係は、どんなレベルで、今でも機能していますか。もし、機能していないならば、どうしたら再生できますか。

3. 活動の分かち合い

1. あなたが現在置かれた状況における同伴と召命の識別のための司牧活動の主な種類を挙げてください。

2. 普遍教会と共有するために最も興味深く、適切であると思われる活動を、3つ選び、以下の形式に基づいて述べてください（それぞれの活動に1ページ以内）。

a) <説明> 数行で、大まかに活動について述べてください。誰が主役ですか。どこでどのように活動が行われていますか。

b) <分析> 叙述形式でもよいので、重要な要素をよりよく理解できるよう、活動を評価してください。目的は何ですか。理論的な根拠は何ですか。最も興味深い見識は何ですか。どのようにそれらを展開しますか。

c) <評価> 目標は何ですか。もし達成されなかったらどうしますか。どうしてですか。長所と短所は何ですか。社会的、文化的、そして教会のレベルにおける影響は何ですか。なぜ、またどういった形で、活動は重要もしくは啓発的ですか。

目次

序文	2
愛された弟子の足跡をたどって	4
一 現代世界の若者	6
1. 急速に変化している世界	6
2. 新しい世代	7
帰属と参加	8
個人と組織の視点	8
高度につながり合っている世代に向かって	9
3. 若者と選択	10
二 信仰、識別、召命	12
1. 信仰と召命	13
2. 識別のたまもの	14
見分けること	15
解釈すること	16
選ぶこと	16
3. 召命と宣教への道	17
4. 寄り添うこと	18
三 司牧活動	20
1. 若者ととともに歩むこと	20
出向いて行くこと	21
見ること	21
招くこと	21
2. 主体	22
一人残らずすべての若者	22
責任を担う共同体	22
参考となる人々	22
3. 場	24
日々の生活と社会的な取り組み	24
司牧活動の具体的な場	24
デジタル世界	25

4. 手段	26
司牧活動における表現方法	26
教育的配慮と福音宣教の道	26
沈黙、観想、祈り	26
5. ナザレのマリア	27
質問	28
1. 統計データの収集	28
2. 状況の考察	28
a) 若者、教会、社会	28
b) 若者のための召命司牧プログラム	29
c) 若者に寄り添う司牧従事者	29
d) 地域別の質問	29
アフリカ	29
アメリカ	29
アジアとオセアニア	30
ヨーロッパ	30
3. 活動の分かち合い	30
a) 説明	30
b) 分析	30
c) 評価	30